

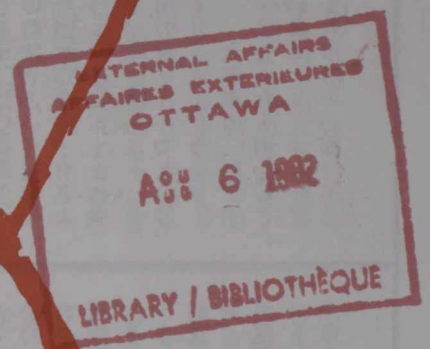
CA1  
EA947  
B71  
#43 Jul. 1982  
DOCS



特集・カナダの音楽事情

1982年7月  
No. 43

ISSN 0389-1852




カナダ



トピックス——2

- カナダのポップ・ミュージック——4
- カナダ・ポップス界のスターたち・鈴木道子——6
- ディスコグラフィ——10
- カナダのクラシック音楽界・堤剛——11
- 二つのカナダ映画を観て・平野敬——12
- われら姉妹都市④ 加賀市&ダングラス町・畑 忠——14
- カナダ研究の潮流⑥ デビッド・スミス——15
- カナダ人物記④ ミッチェル・シャープ——16
- 編集後記——16

Bulletin Canada

発行  カナダ大使館



石油・天然ガスの少なくとも五〇パーセントは、カナダ資本が所有する。

一、石油・天然ガス生産の利益の一部は、ロイヤルティとしてカナダ国民に還元される。

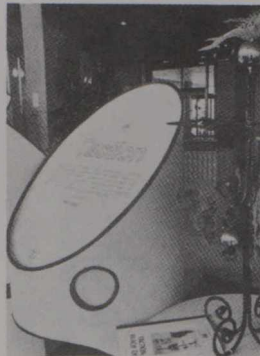
一、カナダの製造業者、コンサルタント、請負業者、サービス会社に、国有地での開発・生産活動が必要とされる物資やサービスを提供する公平な機会を与える。

国有地での石油・天然ガスの探査については、すでに十一社が大西洋沿岸で鉦区設定を申請し、受理されているほか、エッソ・リッセル・カナダほかカナダ企業十社が、北極のマッケンジー・デルタおよびボーフォート海での総額六億ドルにのぼる探査五か年計画に参加することになっている。

### 盲人向けに「触る」工芸展 オンタリオ州各地を巡回

目の不自由な人に工芸品の感触を楽しんでもらおうと、ユニークな「触る」工芸展（写真）が現在オンタリオ各地を巡回している。

この展覧会は、昨年の国際障害者年を記念してオンタリオ州工芸



振興協会が企画・主催しているもので、いろいろな素材で作られた、触って面白い作品十五点が、真中に穴のあいた、ブラックボックスのようなケースに一点づつ入れて展示されている。観客はこの穴から手を差し入れて、作品に触れるわけである。車椅子に乗っている人でも触れるように、ケースの底ははずしてある。作品の題やカタログも、大きな文字と点字で書かれており、目の不自由な人に細かな心くばりを見せている。

展示作品は、ブロンズ製レリーフ、石彫刻、ガラス製花びん、木製ポウル、織物、人形など。

### カナダ・カウンスルが二十五周年 芸術文化の振興に大きな貢献

連邦政府がカナダの芸術を育てる目的で設立したカナダ・カウンスル（カナダ文化振興会）が、今年で創立二十五周年を迎えた。

カナダ・カウンスルの主な仕事は、全国の芸術家や芸術団体を、補助金や賞金の提供という形で援助することにある。対象は映画、演劇、舞踊、音楽、美術、出版など芸術文化全般にわたっている。

画家や小説家、劇場、楽団、美術館あるいは芸術家養成学校など、援助を受けたい個人や団体は、活動計画を提出して審査を受ける。審査には、カウンスルから委嘱された各地の芸術家や専門家（毎年約七百人）があたっている。こうして助成を受けた個人や機関はほ

ほとんど無数といってもよく、カウンスルがカナダの芸術文化の興隆に果たした役割はきわめて大きい。運営資金として、当初、五千万ドルの政府出資金を基金にそこから得られる利子収入などでまかなっていたが、活動規模の拡大に伴い、現在ではカウンスルの年間予算の大半を政府が負担している。

### 日加協会会長に山田忠義氏

近藤晋一氏の死去で空席になっていた日加協会の会長に、会長代行を務めた山田忠義氏（新日本製鉄顧問、世界貿易センター会長）（写真）が就任した。副会長には、奈良靖彦氏（元駐加大使）とマイケル・ガルブレイス氏（BC州林産業審議会日本総代表）が選ばれた。



### 日系作家に新人文学賞

第二次大戦中、強制収容された日系人の当時およびその後の生活を描いた小説「オバサン」の著者ジヨイ・コガワさんが、本年度のカナダ最優秀小説賞と優秀処女作賞を受賞した。コガワさんはトロント在住の日系詩人で、四十八歳。「オバサン」は昨年出版されて以来大好評で、米国でも出版されたほか、日本でも、二見書房から邦訳が予定されている。

日本とカナダの企業家およそ三百人が参加して札幌で開催された第五回日加経済人会議は、五月十九日、三日間の全日程を消化して閉幕した。

今回の会議は、厳しい世界経済情勢の中で開かれ、しかもカナダの対日自動車部品輸出問題、カナダからの対日石化製品輸入急増問題、一般工業製品の対日輸出問題などの懸案を抱えていただけに、従来とはやや趣きを異にしていた。しかし、「保護主義をとって門戸を閉ざすか、相互協力を拡大するか」の二つの道のうち、双方は協力の道を選んだ」とカナダ側のデビッド・M・カルバー団長が述べたように、相互経済協力を今後とも推し進めることで両者は合意した。

四つの分科会のうち、工業製品分科会では、カナダ側が日本におけるカナダ製工業品の輸入拡大を求めた。これに対し、日本側はカナダの輸出促進に協力することを約束、双方の間で①日本側はカナダ側の販売努力に対して、日本貿易振興会（ジエト）と日本貿易会の協力を得てコンサルタント・サービスを提供する②カナダ側は製品輸入対策会議を通じて改善を図る③日加の第三国向け輸出協力を推進する——ことが合意され、そのために日加工業製品促進の窓口を設置することが決まった。

## 経済人会議、相互協力を確認 工業品の対日輸出促進で合意

また同分科会の自動車小分科会では、カナダ側がカナダの自動車部品産業での失業率が三八パーセントに達している現状をあげて日本側の輸出自主規制やカナダ製品の調達に対する協力を求めたが、日本側は今年十一月にトロントで開かれる自動車産業展示会「シテブ・アメリカ」に積極参加することを表明するにとどまった。

農林・水産・食品分科会では、カナダ側は従来通り、日本が安定した需要市場となるよう要請、またSPF材および針葉樹合板に対する関税引き下げを申し入れた。石炭など三分科会に分かれて討議したエネルギー分科会では、キャンドウ炉の第三国向け輸出について相互協力を検討することになったほか、カナダの石油開発に対する日本の投資、LNGの対日輸出について関心の一致を見た。

鉱産物分科会ではアルミニウム、銅、鉛、亜鉛、ニッケルの五品目について市場状況などを分析するとともに、カナダは日本の現在の精錬所に対する精鉱の供給を保障する、長期的展望として日加双方が精錬工場の立地について協議する——など合意した。

なお、今回の日加経済人会議は来年五月、カナダのモントリオールで開かれるが、同会議では観光分科会が追加設置されることが決まった。

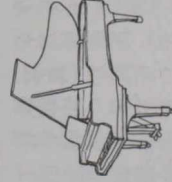
# カナダのポップ・ミュージック

この国特有の静かで控え目なやり方ではあるが、カナダはアメリカ大陸のポピュラー音楽に相当の貢献をしてきた。カナダの音楽家たちは、めったに派手なことをしたり、カナダ色を前面に押し出すことこそしないが、常に世界に向けて歌いかつ演奏している。

アン・マレーのラブ・ソングやゴードン・ライトフットのバラードは世界にこぼれまわし、オスカー・ピーターソンの弾くピアノの絶妙なテクニックやジョニ・ミッチェルの浮き浮きするようなダンス曲にしびれるファンも多い。またボブ・ディランのバックをつとめるためトロントを離れたザ・バンドは、史上最高のロック・バンドのひとつとしてその地位を確立するに至った。そしてカナダと米国のカントリー・ミュージックの「栄誉の殿堂」には、カントリー・ミュージックの元祖の一人として、カナダ人ハンク・スノーの名が刻まれている。

英語圏カナダのポピュラー音楽界にスターが登場しはじめたのは、一九二〇年代から三〇年代にかけて全国的に普及したラジオやレコードが、広い国土に散らばるカナダ人の心を少しずつ結びつけ始めた頃である。当時のエンターテインメン

トのスタイルは、その頃のカナダ社会の空気を反映したもので、英国やヨーロッパの伝統が色濃い面もあると同時に、一方では米国で盛んになりつつあったビッグ・バンド、ボードビル、カントリー(当時はヒルビリーと呼ばれた)などの新しいタイプのエンターテインメントの影響も強かった。ミュージック・ホールはジャズを聞く聴衆でぎっしりうすまり、各地の舞台で minstrel・ショーがくり広げられた。



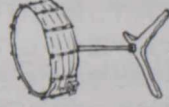
しかしカナダのポピュラー音楽が真の広がり深まりを見せたのは、ロックンロールの熱狂が北米を襲ってからだ。ロックはまたたく間にカナダ全土を包みこんだ。高校という高校にはロック・バンドが結成され、地元のヒーローもラジオから流れるロックに決して引けを取らなかつた。ロックンロールの衝撃は、単にロックそのものの生き生きとしたバイタリティーにだけあるのではない。ロックの登場により、自分たちにも曲を作って歌うことができると信じた若者が、雨後

のたけのこのようにいつせいに現われたのだ。そのことだけで、カナダのポピュラー音楽の様相は一変してしまつた。

新たな動きはフォーク・ソングにも見られた。ロックほど荒っぽくなく、また感情的でもないフォーク・ソングは、より知的満足感を与えてくれた。何千人ものカナダの若者たちが、ギターやバンジューを手にし、三部合唱で妖精の女王や勇敢な騎士のことを歌ったり、またある時は社会の不公正を訴えた。ジョニ・ミッチェル、ゴードン・ライトフット、イアン・アンド・シルビアといった若手の熱心なフォーク歌手の歌が全国の喫茶店で聞かれるようになったのもこの頃である。

一九六〇年代半ばまでに、いろいろな変化がめまぐるしく起きた。高校のバンドとしてスタートしたグループがプロになつたり、他人のものまねから出発した演奏家たちがそれぞれ独自のスタイルを築いたりもした。そしてカナダ生まれの新しい曲がカナダ人の共感を呼ぶようになった。ライトフットは「Early Morning Rain」や「Ribbon of Darkness」、そして雄壮な「Canadian Railroad Trilogy」などの曲のなかで、広大な土地と不気味なばかりの沈黙に対してカナダ人が抱いている

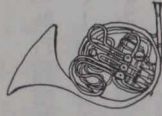
畏怖と愛着の念を見事に歌い上げたし、イアン・タイソンはフォークとカントリーを融合させて、西部流れる者の歌を上品に仕上げた「Summer Wages」、「Four Strong Winds」、「Someday Soon」などを世に送った。これらが刺激となつて、より多くのカナダの若者がはつきりとカナダ的な立場から作曲をし、歌を歌いはじめた。このような時代の要望に正面からこたえたのがブルース・コバーンやマレー・マクロラン、デービッド・ウィフエンであり、またのちに米国ばかりでなく世界中で大成功を取めたニール・ヤングであった。彼らに続いて、タン・ヒルやバルディも登場した。



一方、ロック・バンドはカナダの到るところでクラブやコンサートに出演するようになっていた。またカール・パーキンスやエルビス・プレスリーと同世代のアメリカ人ロカビリー歌手、ロニー・ホーキンスは一九五〇年代にトロントに移り住み、自ら経営するキング・ストリートのナイトクラブでロックンロール・バンドのいわば学校のようなものを開き、多くのバンドを育てた。なかでも群を抜いていたバンド、ザ・ホークスは、ボブ・ディランのバックをつとめたのち、ザ・バンドという名で独立した。ホーキンスが育てたもうひとつのバンドは、ジャニス・ジョプリンのバックをつとめ、まさ

に彼女が求めていた音を与えた。同じくトロントの街では、のちにロック・グループBlood, Sweat and Tearsのリーダーとして名声を博すことになるデービッド・クレイトン・トーマスが、彼のバンドシエイスでリズム・アンド・ブルースを演奏していた。

この演奏に夢中になっていたティーンエイジャーのうちの何人かが、実は今日のカナディアン・ロックのスーパー・スターになるのである。彼らが結成したラッシュ、トライアンフ、マックス・ウェブスター、ゴドー、トルーパーなどのバンドがみなビートの効いた重厚なハード・ロックなのは、彼らがいかにトロントのクラブ・バンドの音楽をそのまま受け継いでいるかを物語っている。



この手のフォークやロックだけが流行ったわけではない。心理的にはカナダ中央部よりアメリカ西海岸に近いバンクーバーでは、チリワックのようなバンドが、西海岸インディアンの様式を実験的に取り入れて新しいサウンドを作り出したし、トム・ノースコットは、ロサンゼルスのレストラン・ニューマンやバン・ダイク・パークスとの共演に刺激されて、気まぐれで空想的な曲を生み出した。

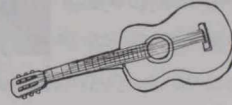
大草原の玄関、ウイニペグでも多くの変化が生じつつあった。レン・カリウー(のちにブロードウェイで『Sweeney Todd』の

大役をこなす)、ダイアン・スタプレー、ジュディ・ランターといったポップ歌手が輩出したほか、ゲス・フリーのようなロックバンドも生まれた。ゲス・フリーはバンドでは成功した部類に入るが、むしろバートン・カミングスや、そこから分かれたバックマン・ターナー・オーバードライブ(ファンにはB.T.O.の名で知られている)を生んだバンドとして有名だ。カントリー・シンガー、ハル・(ローン・バイン)・アローの息子、レニー・アローはカントリーの血筋に背を向けて、ギター界から伝説的とまで言われるソロ・ジャズ・ギターの手法を築き上げた。

大西洋岸では、依然としてバイオリン弾きのドン・メツサーやカントリー・シンガーのフレッド・マッケナといった古い世代の音楽家たちがテレビでははきかかせていたが、新しい世代のミュージシャンも誕生しつつあった。キャサリン・マッキンソンは『Farewell to Nova Scotia』というフォーク・ソングを歌って全国的にヒットさせ、また当時テレビのネットワークで売り出し中のアン・マレーは、ジーン・(スノーバード)・マクレーンの持ち歌を歌っていた。その後、彼女が『スノーバード』を歌って大ヒットを飛ばしたのは、あまりに有名である。エイプリル・ワインなどはマルチ・ギター奏法で独自の力強いロックの世界を築き上げつつあったし、タッチ・メイソン・バンドは東海岸を歩き来しながらブルースを演奏していた。

カナダのふたつの文化圏がぶつかり合

うモントリオールでは、英仏両語をこなすポップ歌手の登場という新しい現象が見られた。そのうちのひとり、バック・ツイー・ギヤランはニュー・ブランズウィック州でのカントリーを皮切りに、ポップのスター兼ディスコの女王の座を占めたし、マイケル・バグリアロは、フランス語で力強いパンチのきいたロックを歌い上げることに成功した最初のミュージシャンであった。ミシシッピで生まれ、粘りのあるゴスペル調のロックを聞きながら育ったナネット・ワークマンは、一九六七年のモントリオール万博でその力強いハスキーな声を披露してからというもの、英仏両語でフアンキーなのを聞かせ続けた。また幼い頃からイギリスやアイルランド、それにフランス系カナダのフォーク・ソングを歌ってきたマカギリケル・シスターズなどは、これらが混じり合ったユニークなフォークの世界を作り上げ、イギリスの新聞から史上最高のフォーク・グループと評されたほどである。



カントリー・ミュージックも隆盛期を迎えた。ハンク・スノーやウィルフ・カーターなどの大衆路線の伝統を受け継いだカナダのカントリー・ミュージシャンは、当然のことながら聴衆にとっては他のジャンルの音楽家よりも身近かで親しみやすかった。まずラジオで人気を博し

たカントリーは、一九七〇年代半ばにはテレビのバラエティ・ショーで一世を風靡するに至った。トミ・ハンター、ロニー・プロフエット、ミルナ・ローリー、マーシー・アラサーズ、アル・チャートニー、リズム・パルス——こういったミュージシャンは、二十年ものあいだ人気を維持し続けている。彼らは彼らで、キャロル・ベーカーやグッド・アラサーズなどの若くて優秀なタレントを中心とする新しい世代のカントリー・ミュージシャンを育てた。

これらのすべてのジャンルがたて糸よこ糸となって見事なタペストリーを織りなし、カナダのポピュラー音楽に深い味わいを持たせている。カントリーはフォークと混じり合い、フォークはロックに影響を与え、ロックはジャズを取り入れた。そして新しいタレントは新しい音楽を生み出す。例えばラフ・トレードは繊細でちよつと気取った都会派の音楽をつくり、マーサやザ・マフィンはバター・ワイズと共に、荒々しいニュー・ウェーブのスタイルを築き上げた。またドクとザ・スラッグスは、現代生活に対するおどけた解釈を、六〇年代初期の陽気で楽天的なポップ・スタイルでまとめてみせた。また目まぐるしい変化についていけない聴衆の心を和ませしてくれるポップ・アーティストも多く、例えばフランク・ミルズのみずみずしいピアノの音やヘグド・ハーディの絶妙なストリングスは、賞だけでなく熱烈なファンを獲得している。

# カナダ・ポップ・ミュージック界のスターたち

## 鈴木道子

カナダのポップ・ミュージック界は、今まさに爛熟期を迎えつつあるようだ。ゴードン・ライトフット、アン・マレー、ブルース・コバーン、ジョニ・ミッチェルといったすぐれた歌手たちがカナダではもちろん、米国その他で次々とヒットを飛ばし、オスカー・ピーターソンやフラנק・ミルズなどのピアノ界の代表選手たちを、カナダの音楽事情に詳しい鈴木道子さんに紹介してもらった。



### ゴードン・ライトフット

Gordon Lightfoot

カナダには優れたフォーク系自作自演歌手が少なくないが、その筆頭にあげられるのが、ライトフットだ。彼は「現代の吟遊詩人」「カナダの英雄」と呼ばれ、ジュノー賞(カナダのレコード大賞に相当)の常連でもある。一九三八年十一月十七日、オンタリオ州オリリア生まれ。ボーイ・ソプラノから始まり、七歳で既にコーヒ・ハウスで歌っている。ハイスクール卒業と同時にロサンゼルスへ。ウエストレイク・カレッジで管弦楽法を学び、CMソングの作・編曲者、プロデューサー、デモ・シンガー等をしてきたが、一九六〇年ビートル・シーガーに刺激されて、フォーク系自作自演歌手となった。「朝の雨」がイアン&シルビアで全米ヒットとなったのを手始めに、プレスリーからバーブラ・ストライザンドまで多くの歌手に彼の作品は愛唱されている。自身の歌でも全米No.1ヒット「サンタウン」や「カナダ鉄道三部作」ほか、名曲・名唱は多い。近年渋さを増したとはいえ、作風・歌唱には一貫したものがああり、イギリスのバラードの伝統をひく物語歌と、人間の心を深く洞察したラブ・ソングは、フォーク/カントリー・タッチの簡素なサウンドと、孤独の影を宿した歌声と共に、時代をこえて訴えかけ

るものがある。

### ジョニ・ミッチェル

Joni Mitchell



ゴードン・ライトフットと双壁をなす女性自作自演歌手。豊かな才能があふれんばかりだが、特にその斬新な感覚は、他を大きくひきはなしている。レコード一作ごとに、独自の作風を發展させながら変化していくことでも、ユニークなアーティストといつていい。一九四三年十一月七日、アルバータ州マクロードにロバータ・ジョーン・アンダーソンとして生まれた。サスカチユワンの学校をへて、カルガリーのアルバータ美術大学へ入学。商業美術が専攻だったが、フォーク・ミュージックに魅了され、ウクレレ、ギターを始め、伝統的なフォーク・バラードを歌うようになる。一九六四年のマリボサ・フォーク・フェスティバル出演以来、トロントを中心に自作を歌う歌手へ転身。一時期チャック・ミッチェルと結婚してデトロイトで活躍した後、ニューヨークへ出るが、彼女の名声はジュディ・コリンズが彼女の「青春の光と影」をヒットさせたことに始まる。そして、ジョーン・バエズ、コリンズと並ぶフォークの三大女性歌手といわれたが、「ウッドストック」あたりからロック・アーティストの影響を強め、近年はジャズメンとの交流でジャズ

色を打ち出すなど、どんどん変化しながら、「レイディイス・オブ・ザ・キヤニオン」「ミンガス」「ジャドリス&ライト」等の名作を生んでいる。また、ジャケット装丁でも見事な画風を示しているほか、映画・TVなど、映像面でも制作、出演と多彩な才能を発揮している。

### アン・マレー

Ann Murray

カナダに住みながら、世界的なスターとして最も有名なのが、アン・マレー。「カナダの恋人」などと呼ばれている。一九四五年六月二十日、ノバ・スコシア州スプリングヒル生まれ。他の兄弟五人全部が男性ということで彼女も男まさりのスポーツウーマン。ニュー・ブランズウィック大卒業後は、体育教師をしていたことがあるが、ピアノを六年間、歌も二年間レッスンを受けており、大学時代からCBCテレビ「シングアロング・ジュビリー」に出演してレコード界入り。六九年「スノーバード」の大ヒットで、一躍世界的に有名になり、カナダのジュノー賞はもちろん、「辛い別れ」でアメリカのグラミー賞の最優秀女性歌手賞も受賞している。カントリー・タッチの、明るく大らかな歌声は、いかにもカナダの大自然から生まれてきた感じがあり、アメリカではテレビでも人気が高い。



## オスカー・ピーターソン

Oscar Peterson

世界のジャズ界でも最も優れたピアニスト。そのスケールの大きいパワフルなサウンド、躍動感と、華麗なテクニックは、ジャンルをこえて、ファンが多い。

一九二五年八月十五日、モントリオール生まれ。六歳からクラシックのピアノを始め、タレント・コ



ンテストに入賞、ラジオ出演をへて、四年、ジョニー・ホームズ・オーケストラで演奏。ジャズ・プロデューサー、ノーマン・グランツに認められて、四九年、JATPに参加、ニューヨークで絶讃をあげ、翌年レコード・デビュー。以来、主としてトリオで活躍。ソロ・ピアニストとしても人気があり、ステージはもちろろん、ライブ、MPS、パブロなど名作を多く残している。現在トロント在住。後進も指導している。

## ニール・ヤング

Neil Young

自作自演歌手の中でも、最もパワーにみちて、卒直に自分を打ち出している一人だろう。バッファロー・スプリングフィールド時代から彼を愛しているファンは少なくない。一九四六年十一月十二日、トロント市で著名なスポーツ記者の息子

として生まれた。少年時代はウイニペグで過ごし、ポップ・グループのニール・ヤング&ザ・スクアイヤーズを結成して活躍していたが、解散してソロのフォーク歌手となり、巡演中にステイブ・スタイルスと意気投合。六六年にロスと一緒にフォーク・ロック・タイプのバック・アロー・スプリングフィールドを結成。西海岸の代表的なグループとなる。これは二年で解散。再びソロ歌手としてレコードも発表した。クロスビー・ステイルス・ナッシュ&ヤングとして、復活。ここでも名作を生み、現在はクレイジー・ホースをバックに、あるいはソロで活躍中。「カムズ・ア・タイム」ほかヒットも多いが、ロック、フォーク系ともに純粋な力強い魅力を放っている。



## ブルース・コバーン

Bruce Cockburn

六〇年代に登場した歌手の多くは、アメリカを舞台に活躍しているが、七〇年以降の人は、カナダをベースに、外へも出ていく姿勢が目立つ。その代表格がコバーンだろう。彼は「最も芸術的なシンガー/ミュージシャン」といわれる。特に彼のアコースティック・ギターは世界でも十指に入るほど美しい。一九四五年五月二十七日、オタワ生まれ。十三歳でギター、十七歳でピアノを始め、ハイ・

スクール卒業後、パリや北欧の街角で自作の歌を歌いながら放浪生活を送った。また、ボストンのバ



ークリー音楽院で二年間、作曲・理論を学んだが、ジャズ/ブルースに興味をもち中退。帰国後、いくつかのロック・グループをへて、七〇年に新進フォーク歌手としてレコード・デビュー。繊細な感受性にみちた作風で、カナダの自然や人間を歌い、近年はキリスト教の信条を歌って、ボブ・ディランと並び称される高い評価を得たり、「勇者よ永遠に」の世界的ヒットを放っている。彼が富沢賢治の影響も受けているのも有名だ。

## バートン・カミングズ

Burton Cummings

カナダ中・西部は、昔からハード・ロック・グループが多く出ているが、六〇年代から七〇年代初めにかけて一世を風靡したゲス・フーは、いわば老舗ともいふべきグループで、多くの有名歌手、ミュージシャンが在籍したことで知られている。カミングズはゲス・フーの全盛時代からメンバーとして活躍、解散後もソロ・シンガーとして大変人気が高い。一九四七年十二月三十一日、ウイニペグ生まれ。少年時代にはパティ・ペイジやダイナ・ショアなどのポップスを聴いて育ったようだが、次第にフアッツ・ドミノ等のロックン・ロールに魅了され、十八

歳でランディ・バックマン率いるゲス・フーに参加。「アメリカン・ウーマン」ほかのヒットを放った。よりハードを目指すバックマンが脱けた後も、七六年に解散するまでリーダーとして活躍。その後はソロ歌手として相変わらず人気が高い。今年「セイア・マイ・ソウル」の世界的ヒットを放ったが、彼の年輪のにじみ味のある男らしい歌唱と、パワフルなロック魂は不滅だ。

## マレー・マクロラン

Murray McLachlan

ゴードン・ライトフォットの次のシエネレーションの代表格が、マクロランだ。彼は世にいう「ディラン・チャルドレン」の一人でもあり、最もカナダ的な自作自演歌手といえる。一九四八年六月三十日、スコットランドのベイスリー生まれだが、五歳の時に一家と共にトロントへ移住してきた。ジョニー・キャッシュをきいてカントリー・ミュージックに開眼。十二歳でギターを始めたが、絵の才能にも秀でて、美術学校の特待生として将来の商業美術家を嚆望されていた。しかしボブ・ディランを聴いて絵で試みることを歌で生かしたいと思いたち、放浪と自作自演歌手への道を歩き始めた。当時の心境は

「子供の歌」に歌われているが、これはトム・ラッシュに愛唱されたり、ジョニー・ミッチェルも彼の



影響を受けたといわれるほど。七一年にレコード・デビュー。一貫して都会に生きる人間像を、暖かく鮮明なタッチで歌っている。一時ロック・バンド、シルバー・トラクターを結成。フォークからロック色を次第に強めている。彼もまた、ジュノー賞の常連だ。

## ダン・ヒル

Dan Hill



若者らしい詩情あふれる愛のバラードの歌い手として、先輩格のブルース・コバーンやマレー・マクロラン等より先に、「ふれあい」の大ヒットで世界的に知られる自作自演歌手となつてしまった。一九五四年六月三日、オンタリオ州トロント生まれ。両親のダニエル・ヒル夫妻はアメリカの社会学者だったが、五〇年代のマッカーシーイズムの烈風を避けて、カナダに移住、ダンはその地で生まれた。父は黒人。母は白人。十七歳の時に「黒人であること」というエッセイをダンは書き、一等賞をとっているし、「マッカーシーの時代に」という自伝的な歌も作っている。両親の跡を継ぐかに思われたが、自己表現で始めた自作自演歌手の道をゆくことに決めて、アメリカに渡ったが挫折。トロントに戻ってきてから、七五年にレコード・デビュー。マクロランの前座をつとめるうちに人気が出始め、次々に美しい作品を

発表。八〇年秋には世界歌謡祭で来日し、最優秀歌唱賞と作品賞を獲得している。

## フェリックス・ルクレール

Felix Leclerc

フレンチ・カナディアン系の最長老といつていい自作自演歌手・詩人・小説家・劇作家・俳優。彼の影響は国内のシャンソン界にとどまらず、広くフランスに及び、ジョルジュ・ブラッサンス、ジャック・グレール、ギイ・ベアール等に大きな刺激と影響を与えた。一九一四年八月二日、ケベック州ラ・トゥック生まれ。木材・穀物商だった父も家族全員が歌や種々の楽器を樂しむという家庭の中で、オタワ大学時代の十八歳、彼は初めて曲を書いている。一九三三年、折りからの不況のあおりで大学中退。肉体労働者・農夫はじめ様々な職業をへて、モントリオールのCBCのアナウンサー、スク립トライターとなり、彼の作品やドラマは脚光をあびるようになる。一方、自作を歌うシャンソン歌手としても、一九三九年にラジオからデビュー。五〇年、彼の名声は次第に高まり、コンパニオン・ドウ・ラ・シャンソンと共にバリのミュージック・ホールをはじめ、フランス各地、ベルギー、スイス等を巡演。翌年、フランスのディスク大賞を受けた。以来、彼はヨーロッパとカナダの両方で活躍しているが、ギターの弾き語りによる彼のモノログ風の淡い歌声は、シャンソン界に活

を入れ、その影響は大きい。簡素な美しい詩は主にカナダの大自然をテーマにして、フォークのような素朴な味わいがあるが、七〇年代以降は、プロテストや社会的なメッセージも含むようになってきた。ほかに映画にも出演しているし、各種の賞の数もおびただしい。

## ジノ・バネリ

Gino Vannelli



ハード・ロッカーの多いカナダでも、バネリはとくに強烈な色彩をもっている。その都会的はサウンドは、新しい世代のものであるし、彼のバネの強いスケールの大きい熱唱は、時にセクシーな魅力を放つて興奮を誘う。一九五二年六月十六日、モントリオール生まれ。父は歌手だったし、ジョー、ジノ、ロスの3兄弟も、音楽の才能に恵まれて育った。少年時代のジノは、ジョー・モレロ、エド・シグペンといったモダン・ジャズ・ドラマーに夢中で、自分もドラマーになりたいと思っていた。九歳位の時のことだ。それが、ビートルズの出で方向が変わり出し、十二歳でロック

ユー。「ブラザー・トゥ・ブラザー」の名作で全米No.1ヒットを放ち、世界的名声を獲得した。

## ラッシュ

Rush



ロック・バンドの興亡はめまぐるしい。名門ゲス・フィー、B・T・O、ザ・バンド等はすでにない。そうした中でデビューから一貫して第一線にいるのが、ラッシュ。この3人組ヘビー・メタル・バンドは、一九六八年、トロントで結成された。オリジナル・メンバーはアレックス・ライクソン（ギター、歌）、ゲイリー・リー（リード・ボーカル、ベース）、ジョン・ラトジー（ドラムス、歌）。現在はニール・パート。平均年齢は十六歳だった。もっぱらレッド・ツェッペリンのコピーをやっていたが、高音に特徴を出していくなど工夫をこらし、本腰を入れてやっていくこうとしていた矢先の七二年、ZZトップの前座に抜擢され、一躍クローグ・アップ。七四年、自作をそろえた「ラッシュ」でデビュー。順調なスタートを切る。その後次第にエレクトロニクスを駆使した壮大なロック・ロマンへと発展しているが、「パーマ



「ネント・ウェイブ」ほか、全米大ヒットの記録も多く、安定した実力を示している。

## メイナード・フアーガソン

Maynard Ferguson



国境をこえて広く活躍している名トランペッター、バンド・リーダーとして人気が高く、特に輝く

ばかりの高音や、ブラス・ロック風の若々しいサウンドは、多くの愛好者をもっている。七六年のモントリオール・オリンピックでの演奏は宇宙中継されて有名だ。一九二八年五月四日、モントリオール生まれ。同市のフランス音楽院で学んだ後、プロ入りして、四三年から自己のバンドで活躍を開始。四八年以来、ボイド・レイバーン、ジミー・ドーシー楽団など、主としてアメリカで活躍を続けている。中でも、スタン・ケントン楽団では、彼の華麗な高音が人気を呼び、彼の名声を確立した。また、リーダーとしても優れた腕前を発揮して、レコードも数多い。

## アルド・ノバ

Aldo Nova

最も新しく登場したスターで、「ファンタジー」の全米大ヒットはじめ、デビュー・LP「ナイト・ファンタジー」も驚異的なベスト・セラーになっている。それらを殆んど全て自分の手で作りあげたとい

うから、彼のマルチプレイヤーぶりも相当なもの。モントリオールから出てきたこの青年は、現在二十四歳のイタリア系。少年時代、ローリング・ストーンズに憧れ、ジミ・ヘンドリックスにショックを受けて、ロック・ミュージシャンになりたいとギター、アンプに夢中だったという。堅い仕事をという両親の希望をいれて、ハイスクール卒業後、一旦は製鉄所で溶接工をしていたが、スタジオの仕事にありついてから音楽の道へ。地元の出版社ATVミュージックのライターとして働く一方、自作のデモ・テープをこつこつと三年かけて一人で録音。殆んどその



ままデビュー盤となった。ライブに近いイメージを出したいという彼の希望通り、迫力と独自性にみちたギター、多彩なロックは、若々しい魅力を放っている。

## ブライアン・アダマス

Bryan Adams

若々しい才能をもった新人の台頭がめざましい。アダマスは、七八年、十七歳でレコード界に登場したロックン・ローラーだが、ソングライターとしても優れたものを持ち、青春の愛と悩みをストレートに歌って、早くも多くの若者たちの共感をよんでいる。バンクーバー生まれだが、外交官の父と共に一家は長い間ヨーロッパ諸国（ポルトガル、イスラエル

等）を回り、イギリスの寄宿学校へも入っている。ギターはイギリスで始め、帰国後、バンクーバーでロック・バンドを友人と結成。シングル盤も作ったが発音で、グループ脱退。七七年にブリズムのプロデューサーでもあるジム・バランスと曲を書くようになり、ソングライターとして好評を博し、翌年ソロでデビュー。「レット・ミー・テイク・ユー・タンセン」がアイスコでヒットしたほか、八一年の「ジェラシー」と「ユー・ウォント・イット、ユー・ガット・イット」が国際的大ヒットとなって人気上昇中だ。

## エイプリル・ワイン

April Wine

キャリア十年をこすロック・グループ。最近になって、そのワイルドで重厚なヘビー・メタル・サウンドは、カナダ国内だけでなく、世界の土俵へ出てきた。カナディアン・ロックが、ハードな印象を与えるのは、ラッシュやエイプリル・ワイン、B・T・Oのおかげだろう。結成は一九七〇年、ノバ・スコシア州ハリファックス市。オリジナル・メンバーは、現在唯一人残っているリーダーのマイルス・グッドウィン（リード・ボーカル、ギター、作曲、当時十八歳）が中心で、デビッド・ヘンマン（リード・ギター）、リッチー・ヘンマン（ドラムス）、ジム・



クレンチ（ベース）の四人。七〇年にモントリオールへ進出。今もここが本拠地だが、翌年早くもレコード・デビュー。第二作「気ままなレディ」をヒットさせて以来、国内では不動の人気を築く一方、国外では大した成功をみせなかったが、七九年キャピトルと契約以来、次第に高まりをみせ、遂に「野獣」を全米ベスト・セラーにして猛進撃中だ。

## キャロル・ベイカー

Carroll Baker

カナダはアメリカに次いで、カンントリー・ミュージックが盛んな国だ。古くはノバ・スコシア出身のハンク・スノーをはじめ、実に多くの歌手・グループがいるが、若手の代表として、ナッシュビルのグラント・オール・オーブリーに招かれたのは、ベイカーくらいだといわれる。一九四九年三月四日、ノバ・スコシア州ブリッジウォータール生まれ。父は熱心な昔懐かしいタイプのワイドル弾きだった。彼女が最初に曲を作ったのは六歳の時。「乞食の少年」という曲で、今でも彼女の愛好曲だ。十六歳の時、一家と共にトロントへ。三年後に結婚して、よき家庭人に納まるはずだったが、バーで友人にせがまれて歌ったことが縁で、グループと共に歌うようになり、また、ラジオのジャンボリーに出演したのを認められて、レコード・デビュー。



## ● ディスコグラフィ ●

日本で現在発売されているカナダ人ポップ・ミュージシャンのレコードは2、3百種類を軽くこえる。その1部を紹介しよう。

- **アルド・ノバ** Aldo Nova  
ナイト・ファンタジー (Aldo Nova)  
EPIC/SONY 25・3P・351
- **アン・マレー** Ann Murray  
アン・マレー・ベスト20  
東芝EMI ECS-90007  
辛い別れ〜アン・マレー・グレイテスト・ヒッツ  
東芝EMI ECS-91002
- **エイプリル・ワイン** April Wine  
野獣 (The Nature of the Beast)  
東芝EMI ECS-81412  
パワー・プレイ 発売予定
- **ブルース・コバーン** Bruce Cockburn  
ヒューマンズ (Humans) TRIO AW-25002
- **ブライアン・アダムス** Bryan Adams  
ジェラシー (You Want It, You Got It)  
ALFA AMP-28041
- **バートン・カミングズ** Burton Cummings  
セイブ・マイ・ソウル (Save My Soul)  
ALFA AMP-28004
- **ダン・ヒル** Dan Hill  
夢の翼 (If Dreams Had Wings)  
EPIC/SONY 25・3P・211  
銀色の涙 (Partial Surrender)  
EPIC/SONY 25・3P・324
- **フランク・マリノ** Frank Marino  
鋼鉄の爪 (Mahogany Rush IV)  
CBS/SONY 25AP-149
- **フランク・ミルズ** Frank Mills  
夢みるピアニスト  
ポリドール MPF-1274  
街角のカフェ (Best Collection)  
ポリドール 28MM-0137
- **ジノ・バネリ** Gino Vannelli  
ブラザー・トゥ・ブラザー (Brother to Brother)  
ALFA AMP-6024  
ザ・ベスト・オブ・ジノ・バネリ  
ALFA AMP-103  
ナイト・ウォーカー (Night Walker)  
日本フォノグラム 25RS-116
- **ゴードン・ライトフット** Gordon Lightfoot  
ゴードン・ライトフットの世界  
一朝(あした)の雨〜サンダウン〜 (Gord's Gold)  
PIONEER P-5528-9  
サンダウン (Sundown)
- **ハンク・スノー** Hank Snow  
ハンク・スノー・ベスト SX-267
- **ジョニ・ミッチェル** Joni Mitchell  
ジョニ・ミッチェル・ライブ・マイルズ・オブ・アイルズ〜  
(Miles of Aisles) PIONEER P-5169-70  
シャドウズ・アンド・ライト (Shadows and Light)  
PIONEER P-5587-8
- **レナード・コーエン** Leonard Cohen  
名作集 (The Best of Leonard Cohen)  
CBS/SONY 25AP-2128
- **リーサ・ダル・ベロ** Lisa Dal Bello  
美しい罫 (Drastic Measures)  
東芝EMI ECS-81439
- **ラバーボーイ** Loverboy  
ラバーボーイ (Loverboy)  
EPIC/SONY 25・3P・280  
ゲット・ラッキー (Get Lucky)  
EPIC/SONY 25・3P・333
- **メイナード・ファーガソン** Maynard Ferguson  
スターウォーズのテーマ (New Vintage)  
CBS/SONY 25AP-833  
ハリウッド (Hollywood)  
CBS/SONY 2317
- **ニール・ヤング** Neil Young  
ライブ・ラスト (Live Rust)  
PIONEER P-5575-6  
カムズ・ア・タイム (Comes A Time)  
PIONEER P-10477
- **オスカー・ピーターソン** Oscar Peterson  
カナダ組曲 (Canadian Suite)  
Ph(マーキュリー) 18PJ-2001  
オスカー・ピーターソン・ベスト・コレクション  
Po(ヴァーヴ) MV-9081-2
- **パッツィ・ギャラン** Patsy Gallant  
ビギニング (Beginning)  
(ディスコメイト) DSP-5114  
リーチ・フォー・ザ・スカイ (Reach for the Sky)  
(ディスコメイト) DSP-8003
- **ポール・アンカ** Paul Anka  
ポール・アンカ・ベスト  
SX-213
- **パーシー・フェイス** Percy Faith  
夏の日の恋/グレイテスト・ヒット  
CBS/SONY SOPO-129
- **プリズム** Prism  
少女のように (Small Change)  
東芝EMI ECS-81483
- **ラッシュ** Rush  
パーマナント・ウェイブズ (Permanent Waves)  
EPIC/SONY 25・3P・221  
ラッシュ・ライブ〜神話大全 (Exit...Stage Left)  
EPIC/SONY 36・3P・325-6
- **ザ・バンド** The Band  
南十字星 (Southern Cross)  
東芝EMI ECS-80392  
ラスト・ワルツ (Last Waltz)  
東芝EMI P-5552-4

## フランク・ミルズ

Frank Mills

「メモリーズ・オブ・ホーム」はたちまちRPMカントリー・チャートに二十六週も登場して、以来、カナダきってのカントリー歌手になってしまった。

最近、ピアノの初心者でも弾けるよう

なピアノ・ムードが人気を得ているが、ミルズもそうした人気者の一人。特に自作の「愛のオルゴール」の爆発的大ヒットで、楽譜もベスト・セラーとなり、世界的に知られるようになった。一九四二年六月二十七日、モン



トリオール生まれ。幼少から母親の手ほどきでピアノを始め、ハイスクール時代にトロンボーンを吹くようになったが、十六歳の時に相ついで両親がガンで亡くなり、彼は医者を目指すようになる。だが、音楽が忘れられず、大学では音楽を専攻。トロンボーンを第一に学んだが、作曲もするようになり、再びピアノにもどった。そして、大学のダンス・バンドにいた影響が、今日の彼の明るくはずむような

愛らしいピアノ・スタイルの基礎になったという。卒業後は、ザ・ベルズというロック・グループをへて、ソロ・アーティストとなったが恵まれず、一時はタクシー運転手になろうかと思っていた矢先に、七八年、「愛のオルゴール」が突然大ヒットになり、スターとなった。現在はバハマに住んでいる。

(音楽評論家)

# カナダの

## クラシック音楽界

### 堤 剛

カナダの音楽界は、歴史的に見てヨーロッパ、アメリカとの関係がとて深いのだが、最近では日本との交流も随分盛んになってきた。

これを書いている時点（五月六日）でも、指揮者のV・フェルドブルル氏が東京芸術大学の客員教授として滞在しており、ピアニストのA・ラブラント氏、それにカナディアン・ブラスの面々が、日本各地で演奏会を開いている。また八月には、トロント大学のL・フェニベシユ教授の来日も予定されている。V・フェルドブルル氏は三回目、カナディアン・ブラスは二回目の来日で、カナダ人の音楽家が次第に日本の聴衆の間でポピュラーになりつつあることをよく示している。

ちなみに、カナダ人演奏家で一番最初に日本へ演奏旅行に来たのはキャスリーン・パロウという女流バイオリニストで、彼女の優雅で華麗な演奏は、当時（戦前）の日本の聴衆をうならせたといえられている。

これまでに日本を訪れたことのあるカナダの演奏家は数多い。オーケストラではス・メータ指揮のモントリオール、小沢征爾指揮のトロント、秋山和慶指揮の

バンクーバーの各交響楽団、オルガン奏者のH・マックレーン、ピアニストのR・トゥリーニ、バイオリニストのS・スタリック、ビオラ奏者のG・スタニツク、フルート奏者のR・エイトキン、ファゴット奏者のG・ズッカーマン、それにコントラアルトのM・フォレスト、また室内楽の分野ではクワルテット・カナダ、リリックアーツ・トリオなどが特に記憶に残っている。

まだ日本を訪れたことのない著名な演奏家（団体）としては、国際的に押しも押されぬ地位を築き上げたオタワの国立芸術センター交響楽団と、そのオーケストラを発足当初から現在の位置まで引張ってきた音楽監督兼指揮者のM・ベルナルディ、室内合奏団ではモントリオールを中心に活躍しているマックギル室内合奏団、常に高い評価を得ているトロント室内合奏団等があげられよう。

最近とみに充実してきているトロントのカナディアン・オペラの将来も楽しみだが、それ以上に日本の聴衆にアッピールしそうなのは、オーフォード弦楽四重奏団。忙がしい演奏活動の合い間をさいてトロント大学で教えるほか、各地でマス

ター・クラスを開いて積極的に多くの人と交流を図る彼らの姿勢は、高い演奏水準とあいまって聴衆の幅広い支持を受ける大きな理由となっている。

夏の間には、カナダ各地で幾つかの音楽祭が催されるが、スケールの大きさ、水準の高さで頭抜けているのは、バンフ、ビクトリア、ゲェルフ、ストラットフォードの音楽祭。バンフとビクトリアは、並行して夏期講習も行っており、その参加者もなかなか国際的。ストラットフォードの方は、音楽よりも演劇の部門の方が歴史も長く、よく知られているが、音楽会の方もE・タウシツク氏の努力により内容、規模共に毎年充実している。

カナダの音楽事情を語る時に、CBC（カナダ国営放送）の占める役割を忘れてはならない。CBCは、全国にある支局を通じて、各地域の音楽文化の発展、向上に積極的に参加しているからである。公開録音の形で数多くの音楽会を主催するだけでなく、大きな支局に



トロント交響楽団

なると専属のオーケストラさえも持っている。それに毎年行われるCBC音楽コンクールは、カナダの若い音楽家にとって大事な登竜門になっており、各部門とも参加者が毎回増えている。

カナダの音楽家にとって、カナダ・カウンスル及び各州のアーツ・カウンスルの援助も無視出来ない。日本にはこの種の組織がないが、簡単に言えば、連邦政府や州政府の外郭団体で、芸術振興評議会とでも訳したらいいだろうか。これらの評議会からの援助はまことに多方面にわたっており、音楽だけをとってみても、各オーケストラに対する助成、音楽学校など教育機関に対する助成、作品の委嘱並びに発表に対する援助、演奏家に対する各種の援助などがあげられる。その選定は、あくまで実力本位で、公正を期しているのはもちろんである。援助は、外国から音楽家を招聘するような場合にも与えられ、最近では作曲家の間宮芳生氏がカナダ・カウンスルの援助でウエスタン・オンタリオ大学に客員教授として迎えられた。

国全体としてもそうなのだろうが、音楽の分野においてもカナダは素晴らしい将来性を秘めている。これは最近の若い音楽家たちの目覚ましい活躍振りによく表われている。よく整備され、充実した教育のシステムに加えて、芸術を何とか育てて行くこうとする気持ちを強くもっている一般市民が、それを助けていることは疑いない。（ウエスタン・オンタリオ大学準教授・チェリスト）

カナダ大使館では、七一年度トロント映画祭で最優秀長編映画賞をはじめ、監督、脚本、主演男優、主演女優、映画音楽などの各部門で最優秀賞に輝いたクロード・ジュトラ監督「アントワーヌ伯父さん」と、カナダの作家W・O・ミッチェルの原作を映画化し、これまた七七年パリ国際映画祭でグランプリをとったアラン・キング監督「誰が風を見たか」の日本語スーパードをこのほど完成、日本各地で映画会を開いている。これを機会に、これら二本のカナダ映画の背景となった時代のカナダ社会について、東京大学の平野教授に解説していただいた。

## 二つの カナダ映画をめぐる 若干の感想

平野 敬一

最近、クロード・ジュトラ監督の「アントワーヌ伯父さん」（一九七一年）、アラン・キング監督の「誰が風を見たか」（一九七七年）という、それぞれ仏系カナダと英系カナダを代表する二人の映画監督の秀作を続けて観る機会をえて、深い感銘を受けた。

「アントワーヌ伯父さん」は仏系カナダ（一九四〇年代のケベック）を扱ったフランス語の作品、「誰が風を見たか」は英系カナダ（一九三〇年代の平原州）を描いた英語の作品で、対象も雰囲気もかなり違うが、この二つの作品の間には、不思議な共通性もあり、観ていると、つい比較対照もしてみたくなる。

いちばん目立つ共通点は、どちらの作品においても子供の目を通してみた大人の世界が描かれている、という点であろう。もっとも、子供といっても「アントワーヌ伯父さん」の主演プロワは、大人の世界へ懸命に背伸びをしているませた十五、六歳の少年。一方「誰が風を見たか」の主演ブライアンはまだ十歳そこそこの本当の子供である。プロワ少年がみるのは大人の愛欲と虚偽がのたうつ世界。映画は厳しいケベックの冬の自然を背景に、生々しい人間模様をくりひろげる。一方、ブライアン少年の場合は、大人の世界のどろどろとした人間模様より、カナダ大平原の自然との交流の方にむしろ重点が



ブノワ少年とアントワーヌ伯父

あり、映画は果てしなく広がるプレーリーを背景に一篇の抒情詩のように展開する。ここでは映画の筋立ての紹介は省きそれぞれ数々の国際的榮譽を受けたこの二本のカナダ映画の名作の背景について、若干の補足的説明をして映画鑑賞の一助にしたいと思う。

### 「アントワーヌ伯父さん」

「アントワーヌ伯父さん」の舞台は、一九四〇年代のケベックの鉦山町。映画のロケ地はケベック州ブラック・レーク。附近にテッドフォード・マインズというアスベストの大採鉱地があり、少し離れた所に一九四九年に長期の大争議で天下に名を轟かせた、その名前からしてアス

ベストスとなっている町もある。アスベスト採鉱はケベックのいわば基幹産業のひとつであり、多くの仏系カナダ人の生活がそれにかかっているのだが、それだけにケベック特有の問題を多く抱えている。この映画にも直接間接にそういう問題が顔を出してくるのは避け難い。ひとつは言語の問題。映画の開幕早々、鉦夫ジョス・ブーラン（仏系）は上役（英

系）と衝突してそのまま会社を飛び出し、妻子を残してこの地を去る。鉦夫をやめ、こんどは出稼ぎの樵になるのである。けんかの発端は、些細なことだが、英語を解さないジョスとフランス語を解さない上役との間には、所詮、意思の疎通が成り立つはずはなかった。言語の不通からくる英仏両系間の断絶（いわゆる「二つの孤独」）の問題は、英系がまだ社会の重要な地位をほとんど押さえていたこの時代のケベックでは、特に深刻だった。ジョス・ブーランが鉦山を去ったのは、言葉の問題やそれからむ自尊心の問題もあつたろうが、鉦山における労働条件の悪さもあずかっていたに違いない。辞めるに惜しいほどの待遇を、彼はこのアスベスト鉦山で受けているはずはなかった。

この映画の時代設定は、前述したように漠然と一九四〇年代となっているだけで、こまかく明示されていないが、画面に出てくる例えばトイレの落書きなどから、第二次デュプレッシー時代（一九四四―一九五九年）の話であるという見当がつく。ケベック州首相としてのデュプレッシーは、人心収攬の術にこそ長けてはいたが、そのやりかたは、さながら独裁君主、特にその労働政策は反動の極をいくもので、組合化の芽を摘み、弾圧することに異常なほど執心し、強い使命感をすら抱いていた。ケベックの鉦山労働者は、カナダの他州の組織労働者に比べると、格段に悪い労働条件のもとで働かされていた。労働者の生活上の強い欲求とデ

エアレスはこういう手を使ってケン  
ツ州における長期政権を維持してい  
たのである。

この映画は、一世代ほどのケン  
ツ州の田舎町で、漸次、大人の世界を開  
かされていくアンワ少年（ジャック・ガ  
ニョシ演）の成長あるいは開眼物語と  
れば、それでいいのかもしれない。人  
死を商売のタネとしか考えない俗物のア  
ントワース伯父（ジャン・デュセツ演）  
と、背伸びしながら懸命に大人の世界に  
参入しようとするアンワ少年との対比が、  
冬のケンツクの雪景色を背景にして、た  
とえようもなく美しく描かれている。そ  
の完成された美しさに、ことさらに来るべ  
き「アベストス・ストライキ」や時の  
州首相エアレスの影を重ねてみる  
必要は、あるいはないかもしれない。し  
かし、この伯父と少年とその他の登場人  
物たちを囲む世界は、一九八〇年代の  
まのケンツクとは違った世界だったとい  
うことを知るのも、無意味でないように  
思われる。

### 「誰が風を見たか」

キング監督の「誰が風を見たか」にな  
ると、がらっと世界が変わる。舞台はカ  
ナタ大平原のサスカチワン州（コケ地  
は同州東南部のアルコラという小村）。  
時代も「アントワース伯父さん」よりさ  
らに十年ほど遡る一九三〇年代の大不況  
期。カナタの平原諸州にとっては、連年  
骨になりようのない現ナ作戦だが、テ  
マクのを帝としたという。これ以上、露  
長のよう支持者（選挙民）たちにはら  
けると、十セント硬貨を、この映画の社  
レスは首相時代、地方へ遊説に出か  
を念頭においていたに違いない。デュア  
ラ、ジエトラ監督はデュアレスの姿  
るのである。この場面を映画に入れなが  
恵み」をカーテンのかけからながめて  
らば、複雑な、屈折した表情でこの「お  
映画に出てくる。親たち（つまり従業員  
長が戸毎におもちやを投げ与える場面が  
ントすることになって、馬車から社  
て従業員の子供たちにおもちやをアレセ  
鉱山会社の社長が、みずから馬車を駆っ  
がやってくる、この鉱山町に君臨する  
る場面がひとつある。毎年、クリスマス  
なくデュアレスの首相の影を感じとれ  
「アントワース伯父さん」に、間違い  
のである。

の早魃でまさにどん底に陥っていた時代  
の語である。

「アントワース伯父さん」と違って、  
この映画にはW・O・ミツチェルの同名の  
原作（一九四七年）がある。カナタ現代  
文学の小古典のひとつと目される原作が



「誰が風を見たか」の一場面

クレア・ロスの名作「私と私の家につい  
ていえは」（一九四二）など。この少  
年の周囲には、子供に対する愛情のかけ  
らもない精神の硬直した女教師や、偏見  
と尊大のかたまりのような町の名流婦人、  
有力者に取り入ることしか考えない教会  
の牧師など、おおよそ心の広さとは無縁の  
人たちが次々に登場し、直接間接に少年  
の世界に影を落とす。その一方、俗世間  
のたてまえや約束事から超越した奇人や  
変人や狂人までも登場し、少年の世界に  
彩りを添える。特に町外れ、平原の真っ  
ただ中に住む密造酒屋（ホセ・フアラ  
一演）の無口な息子とアンワ少年と  
の不思議な友情は、この映画を貫く一本  
の太い縦糸となって観客の心をとらえる。

題名の「誰が風を見たか」は、イギリ  
スの詩人クリスティア・ロセツターの  
有名な詩篇からとったものだが、この表  
題の中の風、あるいは風が象徴する大平  
原の自然が、この映画の真の主役なのか  
もしれない。ミツチェルの原作もそのよ  
うに読みとれるのである。風が主役にな  
るのは、この作品に限らない。一九三〇  
年代の平原州で「風」がもっていたウェ  
イトは、はかり知れない。カナタの女流  
詩人アン・アリオットの「風、わたした  
ちの敵」（一九三九年）は、ミツチェル  
の作品よりもっと冷たく厳しく「風」を  
正視した詩篇として記憶されているが、  
あのですまじい砂塵をまき起こす風を抜  
きにして、三〇年代の平原州の生活は語  
れないのである。（東京大学教授）

前年のアンワ少年の場合、同じく、さまざ  
まの問題がうずまいている。カナタ大平  
原の果てしない広さは、必ずしもそこに  
居住する人々の心の広さと直結しない。  
事情はむしろ逆になることが多いせいか、  
カナタ大平原を舞台にした文学作品には、  
外的世界の広さと人間の心の狭さを対照  
的にとらえたものが多い（たとえばシン

# 感激した“国賓待遇”

畑 忠

あの有名なナイアガラ滝から車で一時  
間半の所に、私たちの姉妹都市ダンダス  
町がある。地図の上では、五大湖のひと  
つオンタリオ湖の西端に位置している。

私たち 第四回加賀市生活体験学生団  
(中・高校生三十三人、引率五人)がナ  
イアガラ滝をへてこの町を訪れたのは、  
二年前の八月始めであった。私たちのバ  
スがダンダス町のあるウエントワース・  
カウンティに入ると、公務でエスコート  
してくれる警官のバイクが、いつの間  
に私たちの前を走っているのに気付く。

町のメイン・ストリートにさしかかると、  
ビルとビルの間に張った大きな横断

幕の一字一字が目  
に飛び込んで来る。

●ダンダス町  
WELCOME TO  
DUNDAS, KIDS  
FROM KAGA. 歓

迎会場へわざわざ  
迂回して町の中を  
進むバスの窓に、町の

人達のにこやかな、そして暖  
かい歓迎の顔々が王二の声に  
混じって、次々と現れる。引  
率している子どもたちも、思わ  
ず王二とまねる。日本で会話練習をした

時の数倍もの大きな声で答えている姿を  
見て、熱いものが私の胸にこみ上げてく  
る。

ホーム・ステイ中、どうしても忘れら  
れないことは、私たちに町議会の傍聴を  
許可してくださり、議事のひとつに私た  
ちを名誉町民にする議案が上程され、満  
場一致で可決されたことである。ベネッ  
ト町長より、私たち一人一人が名誉町民  
の証書をいただき、とても感激した。そ  
のお礼に、祭のはつびをプレゼントした  
ら、Happy Come!と言って町長自らそれ  
を身につけ、豆絞りの手ぬぐいに、はつ  
び姿で議事の運営にあたっておられた。  
祭の時に使用するものであることを説明  
したのに、公の議会で最後まで身につけ  
てくださり、とてもうれしく感じた。

また、後日、日本の総領事やカナダの  
文部次官の方があいさつに見えたが、初  
日にエスコートして下さった警察官や、  
歓迎会場に見えて、私たちとホスト家庭の  
家族の方々と一緒に記念写真におさまっ  
て下さったカナダの連邦警察の騎馬警  
官の方々と共に、日本では考えられない  
ことであった。私たちは、まるで国賓の  
ような待遇を受けているようで、感激の  
しつばなしであった。

約三週間の滞在で一番子どもたちの思  
い出に残ったのは、ナイアガラの滝の観  
光と、広大なトウモロコシ畑に飛び込ん  
で、いくつものもぎ取ってそれをゆで、大  
きなバターのかたまりをこしこすり込  
んで丸ごと食べたことではないかと思う。  
青空の下、ダンスをする者、パーベキエ  
ーに舌鼓を打つ者、友人のホスト家庭の  
方々と話す者——まさに大自然の中の生  
活体験であった。

このようなダンダス町と加賀市の中、  
高校生によるホーム・ステイ交流は、互い  
にもう四回を数えるようになった。感受  
性の強い若い時代に学ぶ生活体験は、言  
葉や習慣が異なっている、人間として  
互いに心を通わせることができ、また互  
いの国情を世界的視野で理解し合うこと  
ができる若者が一人一人増えて行くこと



ダンダス訪問は貴重な生活体験であった。

につながる。

●加賀市  
姉妹都市ダンダス町  
との交際は、あの体験旅  
行が終了時点から始まっ  
たとも言ってよい。息の長い  
交際を今後とも続けるために、  
両市民が良い知恵を出し合って、いつま  
でもがんばりたいものである。世界に多  
くの姉妹都市があるにもかかわらず、私  
たちのように活動的に十余年間も継続し  
ている都市は、少ないのだから。

(加賀市・錦城中学校教師)

石川県加賀市とオンタリオ州ダンダス  
との姉妹都市提携がなされたのは昭和四  
十三年。北米で初めて世界連邦平和都市  
宣言をしたダンダスが、その記念事業と  
して同様な宣言をしている日本の都市と  
姉妹提携をしたいと、東京の世界連邦建  
設同盟に斡旋を依頼したのがきっかけで  
あった。

その後両市は、学童の図画作品の交換、  
親善使節団や生活体験学生団の相互訪問  
などを通じて、交流を深めている。

ダンダスは、オンタリオ湖の西端に位  
置する商業都市で、工業都市ハミルトン  
のベッドタウンでもある。一八四八年に  
建てられた町庁舎は、オンタリオ州で最  
も美しい公共建築物のひとつとして知ら  
れる。一九六七年、世界連邦平和都市を  
宣言した。

## カナダ社会の構造と発展にメス

デビッド・スミス

**カ** ナダの社会についてアカデミックな立場から分析研究した本——今回はこれをご紹介します。

**多** 文化主義の観点からの社会研究には、Royal Commission on Bilingualism and Biculturalismが出した研究叢書のうち、たとえば第2巻 *Education* や「研究」7 *The Italians in Montreal* など何点かの研究がある。フランス系カナダを社会学的に分析した先駆的文献 Everett C. Hughes 著 *French Canada in Transition* (Chicago: University of Chicago Press, 1943)、および Horace Miner 著 *St. Denis: A French-Canadian Parish* (Chicago: University of Chicago Press, 1939) も忘れてはならない。

### キリスト教の影響

**カ** ナダ社会の発展に今も昔も無視できないのが、キリスト教である。S.D. Clark 著 *Church and Sect in Canada* (Toronto: University of Toronto Press, 1948) は、19世紀におけるキリスト教の影響をたどった労作である。プロテスタントとカトリックの抗争に代表されるさまざまな宗教紛争は、カナダ社会に大きな影を落としている。宗教は、たとえば John Meisel 著 *The Canadian General Election of 1957* (Toronto: University of Toronto Press, 1962) に見られるように選挙に影響し、あるいはアルバータ州の社会信用党を扱った W.E. Mann 著 *Sect, Cult and Church in Alberta* (Toronto: University of Toronto Press, 1955) に見られるように政党の結成を促す。あるいはまた、Richard Allen 著 *The Social Passion: Religion and Social Reform in Canada, 1914-28* (Toronto: University of Toronto Press, 1971) が描き出しているように、工業化、都市化に対する国民の態度形成にも影響を与えている。

### 権威に対する態度

**キ** リスト教がヨーロッパ伝来のものであるとすれば、“権威”に対するカナダ人の態度も、やはりヨーロッパから受け継いだものである。この点で、カナダはアメリカと著しい対照をなしている。この辺の問題を追究した本として、S.M. Lipset 著 *The First New Nation: The United States in Historical and Comparative Perspective* (New York: Doubleday, 1963) や、歴史学者 William Morton の *The Canadian Identity* (Madison: University of Wisconsin, 1961) がある。後者は Morton がアメリカで行った一連の講演を集めたもの。最も新しい本では、ア

メリカからカナダへ脱出してきた学者 Edgar Z. Friedenberg による鋭角的な研究 *Deference to Authority: The Case of Canada* (White Plains, N.Y.: M.E. Sharpe, 1980) がある。

**カ** ナダ人がなぜ権威に従いやすいかという問いには、いろいろな解答があるだろう。ただひとつはっきりしているのは、それがカナダの社会構造、階級構造に関係しているという点である。John Porter 著 *The Vertical Mosaic: An Analysis of Social Class and Power in Canada* (Toronto: University of Toronto Press, 1965) は、この点を扱った、カナダの学界で最も有名かつ影響力のある本といってよい。階級の問題は、近年、ますます注目されてきており、Gary Teeple 編 *Capitalism and the National Question in Canada* (Toronto: University of Toronto Press, 1972)、Wallace Clement 著 *The Canadian Corporate Elite* (Toronto: McLelland and Stewart, 1975) などの労作が出ている。

### 都市と農村

**カ** ナダ経済は天然資源に頼る部分が大きいとはいえ、カナダ人は基本的に都市型国民である。この点は社会学研究にも色濃く出ている。John N. Jackson 著 *The Canadian City* (Toronto: McGraw-Hill Ryerson, 1973)、Harold Kaplan 著 *Urban Political System* (Toronto: Copp Clark, 1968)、S.D. Clark 編 *Urbanism and the Changing Canadian Society* (Toronto: University of Toronto Press, 1961) などが、その例としてあげられよう。

**視** 点を都市から移すと、古くからの農村社会に都市化が及ぼす影響を分析した文献が目につく。Jean Burnet 著 *Next-Year Country: A Study of Rural-Social Organization in Alberta* (Toronto: University of Toronto Press, 1951) は、当時の研究動向の典型例として参考になるし、Rex A. Lucas 著 *Minetown, Milltown, Railtown: Life in Canadian Communities of Single Industry* (Toronto: University of Toronto Press, 1971) は、資源産業都市の変貌を扱っていて興味深い。

**最** 後にカナダの社会研究文献でこれだけは欠かせないという本、S.D. Clark 著 *The Social Development of Canada* を紹介しておこう。カナダの社会についてこれから勉強しようという人には、最高の入門書である。

(サスカチュワン大学教授)

## カナダ外交の基本路線を敷いた

# ミッチェル・シャープ

現在のカナダ政府の外交政策は、一九六八年から七〇年にかけて行われた「外交政策の見直し」が基本になっている。

一九七〇年に下院に提出された『カナダ国民のための外交政策』は、カナダ外交

の方針や政策目標を、

「総論」「太平洋」「ラテン・アメリカ」「ヨーロッパ」「国際協力」「国連」「ソ連」

に分けて論じ、外交政策の柱として、「経済成長の促進」「主権と独立の保障」「平和と安全保障への努力」「社会正義の推進」「生活の質の向上」「調和のとれた自然環境の確保」を

あげた。

またカナダの対米政策については、一九七二年にいわゆる「第三の選択」を発表した。これは、対米関係の現状維持、米国の一体化の促進という二つの選択を避け、カナダの経済その他を強化し、カナダの脆弱性を少なくする——という第三の道を選ぶというものである。

カナダの主権、国益、カナダ人の価値

観を最優先するこうした外交方針をまとめたのが、一九六八年から七四年までトルドー政権下の外務大臣をつとめたミッチェル・シャープ氏である。この外交方針は、基本的には現在も変わっていない。

シャープ外相の在任時代に、カナダが米国などに先がけて中国を承認したのもまだ記憶に新しい。カナダと中国が相互に承認し合い、外交関係を樹立するという共同声明がストックホルムで発表された一九七〇年十月十三日、シャープ外相はオタワで次のように述べている。

「カナダと中国の外交関係樹立は、両国間の関係増進にとって重要な一歩である。われわれは、新しい、重要なコミュニケーションの道を開いた。これを通じてあらゆる面にわたる両国の関係を拡大・発展させたいと希望している。」

中国承認に当たって、カナダは台湾に対する中国の立場に「留意する」ことで中国の了解を得たが、この「カナダ方式」は翌一九七一年、カナダなどの支持を得て国連加盟を果たしている。

中国承認と



シャープ氏

カナダ外交政策の再検討以外にも、シャープ外相は国連を通じた世界の平和維持や軍縮、海洋法や環境保護問題、対外援助に関して大いに腕をふるった。

シャープ氏は六年間にわたる外務大臣の地位を退いてからも、枢密院議長兼自由

党下院総務の要職をつとめた。しかし一九七六年の秋、次の選挙を待たずに政界から引退することを決心、閣僚を辞めて「陣笠議員」になる。

そして、ある日、トルドー首相から「北方パイプライン庁が設立されたら、その総裁にならないか」との声がかかった。シャープ氏は二つ返事で引き受けた。七年五月一日、シャープ氏は議員を辞め、翌日、発足したばかりの同庁の総裁に任命される。そのとき六十七歳であった。

米加両政府は、一九七七年、アラスカの天然ガスをアラスカ・ハイウェイに沿ってアルバータ、サスカチュワン両州を経由、米国に輸送するパイプラインを共同で建設することに合意したが、北方パイプライン庁はこのパイプライン敷設事業を遂行するために設置されたカナダ側の機関である。このパイプラインには、カナダ北方のマッケンジー・デルタやボート海で探査または開発中の天然ガスを南へ運ぶ支線が接続されることになっている。国内的にもまた対米的にもきわめて困難な、環境問題や資金その他の難問をかかえたプロジェクトであるが、シャープ氏は政治家として、また外交官としての長年の経験をかかして、さまざまな困難を乗り越えてきた。

シャープ氏はまた、日本、米加、ヨーロッパ地域の民間有識者で構成する三極委員会（日米欧委員会）の北米副委員長としても活躍しており、委員会の会議に出席するため、日本にもたびたび来日している。七十一歳。

## 編集後記

○少し趣向を変えて、ポップ・ミュージックを中心にカナダの音楽界を特集してみました。鈴木道子さんに、日本で現在発売されているカナダ人ポップ・ミュージシャンのレコードをリストアップしてもらいましたら、われわれの予想をはるかにこえたため、ごく一部しか掲載できませんでした。カナダ人の歌や曲は、日本でも広く親しまれているようです。

○カナダのクラシック音楽界の状況については、日本におけるチェロの第一人者で、カナダでも活躍しておられる堤先生にまとめていただきました。

○平野先生に「二つのカナダ映画」について書いていただきました。先生の一文は、映画に写し出された当時のカナダ社会を見事に描いています。

○当広報紙の発行日がまちまちで、皆さまにご迷惑をかけています。できるだけ発行日を統一しようと努めているのですが、商業雑誌と違ってなかなか思うようにいきません。ご寛容下さい。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100 東京都港区赤坂七丁目三三三三

カナダ大使館広報部